

## 曾根崎心中とは何だったのか？

常吉 幸子

元禄十六年五月七日、大坂竹本座初演『曾根崎心中』は、近松世話物浄瑠璃の起点として、極めて重要な位置を占めている。ただでさえ社会現象としてあつた心中死の流行に拍車をかけ、三年越しのヒット作として竹本座の経済状態を劇的に改善したと、『今昔操年代記』<sup>①</sup>の記事によつて知られる。最初の世話物浄瑠璃でなかったとは言え、近松門左衛門の一連の世話物浄瑠璃の起点となり、他にも大きな影響をあたえた、重要な作品であることは間違いない。

しかし、特にこの作品について重視するべきなのは、『曾根崎心中』という作品自体の、きわだった特異性ではないだろうか。まるでデイズニー作品のような、ロマンティックラブを形象化しているという点で、後継作に模倣されていったのは当然として、この作品成立時点で見ると、後導き情けで教え、恋を菩提の橋となし「未来成仏間違いなき、恋の手本となりにけり」と歌い上げられ、互いを唯一の相手として、すべてを犠牲にして死に向かつていく。たとえば、日本文学史上、「源氏見ざる歌よみは遺恨の事也」と、六百番歌合<sup>②</sup>の評において、俊成に喝破され、日本文学史上最も「艶」なものとされるかの『源氏物語』でさえ、たとえば「帚木」<sup>③</sup>冒頭では光源氏を〈困ったひと〉扱ひしているではないか。

『曾根崎心中』は、さきほど「デイズニー作品のような」などと不用意にいってしまったが、ことほどさように、現代人である私たちにとつても、観念的でもあり、典型的でもある、ロマンティックラブイデオロギーをその思想背景として感じさせる作品となっている。

では、このデイズニー的思い切りの良さをもつ、『曾根崎心中』のその

「思い切りの良さ」はどこから来たのだろうか。この作品は冒頭の観音めぐりにおいて、

げにや安楽世界より、今この娑婆に示現して、我らが為の観世音、  
仰ぐも……

と、謡曲『田村』の詞章をつかい、元禄十六年当時においては、「観音の映像だけは、強烈に呼び起こしうるもの」であり、さらにその観音の映像をこの場面ににダブラせ、観音の示現にお初の示現を重ねる」ということだと、かつて今尾哲也<sup>④</sup>は、ロマンティックでビビッドな読みを提示した。お初が曾根崎の森で息絶えたあと見事に成仏し、なんども蘇つて「徳兵衛」を救う、循環する構造を明確に提示し、当時の聴衆の心をわしづかみにしたというのである。

〈田村伝説〉を構成する多様なものを、当時の観客が想起できたかどうかは確かに怪しいかも知れない。確かに、お初に重なる面影が、観世音菩薩のそれであり、今尾の提示する循環する構造が圧倒的な力を持つことになったというのもその通りかも知れない。この〈構図〉の魅力は強力であり、いまどきの学生たちにさえむしろ新鮮な感動をもって理解される。ここでの観世音菩薩の面影は、この作品におけるロマンティックラブイデオロギーに、何度も繰り返して恐縮だが、まるでデイズニー作品におけるそれのような、思いきりのよい〈True Love〉の観念を核心として持つ思想に、当時の観客に留まらぬ普遍的な享受者への訴求力を保証しているのは、間違いないだろう。

このようなあり方をもつのが、『曾根崎心中』のきわだった特異性である。そして、その〈観世音〉のイメージの力をお初に重ねることによって純化し、この感動的でキャッチーな構図を、特筆すべきものとして提示したことは、作品研究における、有効な観点の呈示として、非常に重要である。ただ、どうしても気になるのが、〈田村伝説〉の総体と、それに連なる、ゆたかな民族的な想像力の広がりとはともかく、直接の引用関係を持つ、謡曲『田村』そのものは、もう少し意味を認め、視野に入れてみてはどうだろうか。謡曲則ち能は、当時広く知られた、教養であり、〈お稽古〉によって、触れる機会があり、そのお稽古をしている当事者ではなくても、お相伴してみききし、自宅や本家、知人宅のライブラリー・蔵にあつて、絵本や子どもへのかたりきかせなど、あらゆる機会にアクセ可能な作品であつたと私は考えている。最低三十人に一人が知っていれば、「みんな知っている」といえるし、常識的教養といえると考えられるからだ。具体的には『曾根崎心中』を気に入つて竹本座にさいさい通い、「なんかきいたようなもんくやな」と呟けば、「ありゃ『田村』やな」と教えてくれる人が近場におり、「たむらつてなに」と呟けば「おまえ何にもしらのやな」と一蹴されることもあれば、得々と説明してくれる物知りの御隠居様などが、いまいものでもないからである。享受者の、それが現実世界である。川柳にも謡曲だねの作品は多い。まあ、上方落語的現実というべきかもしれないが。<sup>⑤</sup>

近松の作品を、学生相手に講読し、講義して繰り返し目を通してうちに、わかってくるものが、見えてくるものがあつた。近松は少なくとも〈世話物浄瑠璃〉とゆるくひとくくりにされる作品群においてみる限り、わりと一貫した目的意識のようなものをもっており、その表現手法においては、極めて巧妙で自覚的にそれを選んでいるのだ。それが、この「冒頭」ともいえるが、「お初の出端」ともいえる、この『田村』の引用なのだ。そして、先に引用した部分の後に続くのは、見え渡りたる名所を列挙する、名所尽くし、寺の名尽くしである。『田村』の能の一節

を、観音めぐりの節事において、彷彿とさせるような、巧妙な作りになっている。いわば、『曾根崎心中』の観音めぐりは、謡曲『田村』の額縁に飾られてそこにあるともいえるのである。

そして、この『田村』の一曲は、蝦夷を討つた坂上田村麻呂の物語にふさわしく、鈴鹿山の鬼神退治の物語でもあり、「あれ見よ不思議やな」以降は、千手観音の千の御手から鬼神の上に「千の矢先」が降り注ぎ「還著於本人」つまり、悪事は悪人自身の上に戻る、という仏の道理とともに、仏力による勝利がうたわれて終わる。景気の良い勝利の物語なのである。もし『曾根崎心中』が世話悲劇なら、不協和音でも発生しそうだが、現実はこの作品においてはそうではない。この作品は、全体から〈勝利〉が響く。そう、『曾根崎心中』は心中における〈True Love〉の勝利の物語と読むように、この作品の補助線として引用された『田村』は機能しているのではないか。

『曾根崎心中』については、早くは嵐三右衛門座による歌舞伎による再演や、それに准ずる内容と思われる紀海音改作による豊竹座の再演から、〈九平次問題〉があつたといえる。いずれも正徳五年のものである。そこには徳兵衛の伯父であり主人でもある「徳右衛門」が登場し、徳兵衛を救おうと九平次の悪事を暴く展開がある。<sup>⑥</sup>法華経普門品にあり、『田村』にも使用された仏語である「還著於本人」の行文に含まれた展開であるともいえる。近松が竹本座初演の段階でその「還著於本人」な展開を考えていたかどうかは不明であるというしかない。そのような展開を提示しないと、この人気作を知り尽くした観客が納得しなかつたともいえる。近松自身の本意はその初演時においては、「還著於本人」なのだから、気にせず楽しんでもらいたい、といったところであろう。

本稿において、筆者が考えたいことはふたつある。ひとつは標題の通り『曾根崎心中』で近松がなにをしたのか、何を成し遂げたのかを探つ

てみたい、ということである。ただ、その背景として筆者にとって重要なもうひとつがある。それはここまで読まれてきた方が、若干違和感をもたれたかも知れないという筆者自身の危惧とも関わるものである。近松の世話物浄瑠璃が、ときに、作品を越えてあたかも全体がひとつのパズルであるかのように、縦横に補助線が飛び交う（総体）をなす作品群だ、ということである。その根拠を示せ、といわれるのであれば、その全体を順次読み解きつつ、全体像を示すことができたとき、その根拠も示せたことになるだろう、としか今のところいえぬ。ただ、この観点は、近松の世話物浄瑠璃を理解する上で、不可欠なものだと筆者は考えている。

この（九平次問題）については、このような底の知れない薄気味悪い極悪人が都合よく主人公徳兵衛を陥れて心中に追い込む展開が、安易であり、作品の瑕瑾といえるといった見方もありがちな気がするが、そのような見方を、筆者はとらない。命代わりの大切な金をまんまとだまし取られてしまう徳兵衛を「間抜け」と評した論者もいたが、そのような見方も、筆者はとらない。お初の「出端」に謡曲『田村』が使われていたが、その意味は、とても重要なものであった。当時の一般的な観客の想念の中に、「観世音菩薩」の面影を映し出したとすれば、同時に鈴鹿山の鬼神退治、その天地をゆるがす鬼神のむれに対する「観音力」による勝利の面影もよぎらなかつたはずはない。

『曾根崎心中』は、確かに徳兵衛の身の上にとってみれば、悲劇であったかも知れない。しかし、作品全体に洋溢する不思議にポジティブな力強いトーンは、この『曾根崎心中』という作品を組み立てる近松の手腕のうちにある。雑音も不協和音もなくこのハーモニーを組み立てた手腕には敬意を覚える。（九平次問題）は雑音ではない。九平次の「出端」にも、謡曲『三井寺』がおかれ、九平次理解のための補助線が引かれているからである。遊興帰りでほろ酔いの、ご機嫌な九平次とその遊び仲間たちが、『三井寺』をテーマに登場する。

〔徳地謡〕  
初瀬も遠し、難波寺、名所多き鐘の声、つきぬや法の声ならん、山寺  
の春の夕暮れ来てみれば、……  
大夫ノ謡

「ヤア、お初、先なは九平次」という、徳兵衛の一続きの台詞に割り込んでくる形である。謡曲『三井寺』も同様に、三十人に一人以上知っている、という意味で、だれもが知っているといえ、大坂町人の一般教養のうちにあるといえるなら、この「喧嘩」の場面の理解にも、近松はしっかり補助線を引いているといえるのではないだろうか。

『三井寺』は、はるばる清見が関から我が子を訪ねて放浪してきた「物狂い」狂女の物語を描く。彼女は物狂いとして好奇の目を集めている。我が子「千万」の声を聴いて正気に戻り、わが身の浅ましい姿、身の上を嘆く。物狂いとは見えているが、彼女の中には、我が子を思うという真実があり、物狂いとして好奇の目を集めたことが、奇跡的な親子の再会となったこと、親子の契りは絶えずその孝行の威徳によって富貴の家となった、という。この『曾根崎心中』では徳兵衛が、物狂いのように好奇の目を集め、ぶちたたかれる。髪も帯もほどけた哀れな姿になって「よろぼひ尋ね回」る徳兵衛だが、人々の前で、わが身の真実を語り、申し開きをする。その様子は

男も立たず、身も立たず、エ、最前につかみつき、食ひついてなりとも死なんものをと、大地をたつき、齒がみをなし、拳を握り、嘆きしは、道理とも笑止とも、思ひやられてあはれなり。<sup>⑤</sup>

つまり、狂乱の体ではあるが、真実は徳兵衛にある、という描き方をしているといえる。浅ましい姿で狂乱の体を示す好奇の目を集める人物の中に「真実」がある、という構図である。そして、

ハアかう言うても、無益のこと、この徳兵衛の心の底の涼しきは、三日を過ぎず、大坂中へ申し訳はしてみせうと、後に知らるゝ言葉の端、いづれもご苦労かけました、御免あれと、一礼述べ、破れし編笠拾ひ着て、顔も傾く日影さへ、曇る涙にかきくれく、すごく帰る有様は、目も当て、られぬ……

徳兵衛の真実は、心の底の涼しきは、後に明らかになる。もちろん心中死によつてである。実にうまい本歌取り。物見高い人々の前に曝された徳兵衛の恥辱。しかし、それは後に実を結ぶ。徳兵衛とお初は血の海の中で死ぬ。その遺体も、死に姿も、人々の好奇の目にさらされる。物見高い町人たちのことだから、何人かは、ひよつとすると意外に大勢が、彼らの死に姿を見たであろうし、何人かが見たと言うことは、みなが知っているということである。

近松はぶれず、実にわかりやすく、その構図を描いてみせる。この『三井寺』利用も、わかりやすさのためである。よつてたかつて打擲されるものに真実と正義がある、なんて言うのは、何もなければ、さほどわかりやすい事態ではないからだ。世の中には自分たちが口を極めてそしている相手が、自分たちより正しいかも知れない、などとは夢にも思わないお馬鹿さんが多い。そしてそれが普通なのだろう。

〈九平次問題〉をどのように解くべきだろうか。徳兵衛の苦難とその成就のように訪れる心中死ほどには、この人物はわかりやすくはない。物語をあたらねず、唐突な現実のように、そこに置かれているからである。おもうに、九平次は大坂町人たちの「現実」を代表しているのだろう。私自身が本務校に赴任したばかりの頃、ある学生が『曾根崎心中』をテーマに卒論を書いた<sup>⑧</sup>が、あれがなかなか正鵠を射る解だったかも知れないと、現在でも考えている。彼女は宮本又次の大坂町人論を調べ

て、九平次が信用こそ命と考える大坂町人の価値観を代表している、とした。とすれば、自分の商人としての信用だけは、絶対に傷付けたくないはずだ。平野屋主人からの願つてもない縁談を、遊女なんぞのためになげうち、「平野屋主人」となるという出世の道も棒に振ってしまう徳兵衛は、油屋主人である九平次自身の価値観を侮辱する行為をしたといえるのではないか。あれは命代わりの金で、返せなければいけないとして、生きていけなければどうするのか。はいつくばってわびたなら、いったんはあとを継がせようと考えた評判もよい実の甥のことだ。ひよんなことでうまく転べば、平野屋主人となる目も消えたわけではないかもしれないではないか。そうなれば、感謝して欲しいぐらいのものだ。九平次は、そのぐらいのことを考えていたのかも知れない。九平次の背後には、大坂町人の現実と、したたかな現実感覚がある。どう見ても悪意の嫌がらせとしか見えないことを執拗に繰り返す奴はいる。内心自分の方が正しい、キツイ教訓を垂れてやっているのだ、ありがたく思え。いまどきハラスメントで訴えられるような手合いだが、訴えられても何が悪かったかわからない。いわば「還著於本人」。きつとそれなりに帰ってくるものもある。作者近松にとって、それは織り込み済み。わざわざ言及する必要も感じなかったのではないか。

さて、九平次に比べれば、お初と徳兵衛の背景にある、まるでデイズニー映画のようなヘロマンテックラブイデオロギー<sup>⑨</sup>のほうが、よほど奇妙である。こんなものがどこから出てきたのだろうか。『曾根崎心中』の「お初徳兵衛道行」そっくりな道行文が、同時期の歌舞伎、『からさき八景屏風』<sup>⑩</sup>に用いられている。近松も作者として関わっているもので、同じ心中ものあつては、参考にならないはずがない。これは、どのような作品か、見ていきたい。

『からさき八景屏風』は、元禄十六年五月中旬以前と推定されている。

⑩ この作はつまり『曾根崎心中』とほぼ同じ時期の初演であり、かつ、近松門左衛門が作者としてその名を連ねていることなども、だが、その絵入り狂言本に記載される心中道行が、曾根崎のお初徳兵衛道行と同一文と言ってよいほどよく似た文章の使い回しである点も、その先後関係をめぐって関心をひいてきた。但し、祐田善雄<sup>⑪</sup>もその先後関係についての判断は慎重であるし、松崎などは、絵入り狂言本に記載された歌謡などが、舞台で使用されたとは限らない事例<sup>⑫</sup>まであげている。

この『からさき八景屏風』の作品としての特質を言うならば、歌舞伎なのだから当たり前なのだが、いかにも歌舞伎らしい猥雑さとノイズにあふれている点が指摘される。お家騒動的枠組みをもち、心中の片割れとなる主人公が「清兵衛実は姉川右近」と、実は流浪の身の若殿である、とされている点である。筆者が重要だと考えるのは、(True Love)とはかけ離れたこのお浅・清兵衛のカップルの関係にある。清兵衛は実は姉川の若殿右近であり、「にほの前」と婚礼したなり、蓄電して行方知れず、という設定になっている。右近の継母である「姉川後室」は我が娘「びわの前」を右近にめあわせることを目論んで、「にほの前」の殺害を謀り、その共謀者が念仏をすすめる鷹禅僧だったり、行方不明の右近に「後室」と称して「ゆり姫」と祝言を挙げさせようと、そのため若殿「右近」に仕立て上げられるのが、ところてん屋の「才兵衛」。舞台にかかれれば目が回るような面白い芝居になるかも知れないが、こうして内容をながめる限り、雑音だらけのほとんど意味不明なものに見える。

そして、『半七三勝七年忌』として劇中劇があるのだが、これが、『心中大鑑』の二の二「辛崎夜の涙」で「萬大夫座」でおつた・小兵衛が見たとする「米屋の心中」にあたる。そこで「座本大和屋藤吉」の「口上」があるので、それをここに引用してみたい。

狂言の義に付皆様へおことはり申上ます。此度狂言を替えまするにつきまして。町の御ひいきの御方様の仰られますは。切の心中の狂言は間もない事じや程に。やはりいたしたらばよからふとござります。切に仕りましてはめづらうもござりませぬゆへ。甚兵衛門左衛門と相談いたしまして、中へ入ります。しぐみは替りませぬ共。上の狂言よりうつりまして。切へつゞきますやうにしぐみましたがおなぐさみに成ませふかと存いたしました。左様思召御けんぶつを頼上ます。

さて、この「口上」の興味深いところは、「心中狂言」を舞台化するにあたって、座本大和屋藤吉も、作者近松門左衛門も、大和屋甚兵衛も、この行文からは、あまり確信も自信もなく、だから「御ひいきの御方様」に相談したのだろう、と、そのように聞えることである。

近松は、元禄十六年四月から五月にかけて、ちょうど大坂に来て居たとき、曾根崎心中、つまり、曾根崎天神(露天神社)での心中事件に遭遇したとき、あの『曾根崎心中』をつくろうと思つたのだろうか。菊池聡子氏は、歌舞伎評判記の研究会に属し、興味をもって調べてみて、坂田藤十郎も、近松門左衛門も、歌舞伎興行において「心中狂言」で成功したことがない、という興味深い事実を報告されている。<sup>⑬</sup>とくに、元禄十年『傾城七堂伽藍』については、伊原敏郎『歌舞伎年表』第一巻に「今年、藤十郎『七堂がらん』に失敗す」とある。評判記『歌舞伎三所世帯』の記事だという。また、他座では、心中狂言は多く上演され、大当たりもあるのに、藤十郎―近松―万大夫座のそれは、非常に少ない。藤十郎の芸質とあわなかつたのかも知れないというのだ。その藤十郎のものでキャリアを積んできた近松も同様かも知れない。成功したことがなければ、手を出さないのでは、ということである。

この「口上」には、『半七三勝七年忌』実は「米屋の心中」について、やろうかどうか御鼻筋に相談した、というのだ。この逡巡は、心中狂言の制作上演について、逡巡した、ということだろう。理由はこ

の近松を含む制作チームは、心中狂言で成功したことがないから、ということだろう。この『からさき八景屏風』を見ると、その理由は非常にわかりやすい。『曾根崎心中』のような、純粹でまっしぐらの〈True Love〉ストーリーではないからだ。「口上」にもためらいが見られ、座本からして気乗りがせず、近松も大和屋甚兵衛も、その「相談」に加わっている。それは、『心中大鑑』<sup>⑤</sup>所収「辛崎夜の涙」にいう、「萬太夫座」の「米屋の心中」の事かも知れないが、実のところこの『からさき八景屏風』の事情も同様かも知れない。ただ、「万太夫座の米屋の心中をお薦・小兵衛が見た」という評判が後押しをしたかもしれない。もちろん万太夫座の米屋の心中が当たりだったかどうかは不明である。可否を相談しつつ、小技を駆使して新し味をだそうとし、おぼろげと上演にこぎ着けた、といった雰囲気伝わってくる。私らに言わせると、命はひとつ、死ぬのも一度なのに、心中して一緒に死のうという相手が唯一の〈True Love〉でないというのは、甚だ面白くないはなしなのだが、この『からさき八景屏風』は、そのような発想自体を欠落させているように見える。主人公清兵衛と姉川右近には、正室「にほの前」、後添い候補「ゆり姫」、おなじく「びわの前」、屏風屋の娘「おあき」と、女たちが群がっている印象だ。そればかりではない。「にほの前」など姉川の後室らがたばかって、姉川右近は死んだから、その供養の石塔の前であとを追って自害しろ、とすすめる。しかし、姉川右近が死んだという事実を疑い、なかなか騙されて死んでくれない「にほの前」はどう考えても「心中死」という観念に、親和的でない、といわざるを得ない。近松も含む、制作チームの発想は、「心中死」という観念に始めから親和的でなく、どうやったら観客が喜ぶ心中狂言が作れるのか、その解決策を、全く思いつかない、といった状況だったのである。「辛崎夜の涙」では、わがままに無軌道に欲望に従って暴走したあげく、小兵衛は現実の窮状を受け入れられず狂乱する女・お薦を帯で自分に縛り付け、無理心

中死を遂げる。いやな話だが、心中大鑑筆者は、思いあつた中には違くないから、不心中ではなく心中だ、と結論づけている。

結局、「実は姉川右近」という仕掛けがセーフティネットとなって、飛び込んだが助けられ、ハッピーエンドでおさまることになるのだが、こんな芝居がうけるはずがない、と思うのは私だけだろうか。

さて、大問題が残った。『曾根崎心中』のまるでデイズニー映画のような、〈True Love〉は、一体どこから湧いてきたのか。である。そもそもロマンテッククラブイデオロギー (True Love) の観念は、一体どうしてこれほど世界に蔓延することになったのだろうか。

David M. Buss の「The Evolution of Desire」<sup>⑥</sup>という面白い本がある。

私たち人類の先祖が、繁殖のために必要だったこと、つまり、女性の若さと健康、男性のステータスが配偶者選別の戦略として、今に至っている、というのだ。繁殖に成功し、生き残っていくために必要かどうか、が配偶者選別に今なお有効で、だから、功なり名とげた男性が、二回りも年下の美女と結ばれる、という現象を統計的に調査したものである。ただ、私が興味深かったのは、この Buss 氏が、ネットで読めるある文章で、自分も〈True Love〉を信じている、と述べていることだ。

面白いのは、では〈True Love〉とは何なのか、たとえば、ステータスなど全くない男性を、配偶者として選べば、それが〈True Love〉なのか。全く若くも美しくもない女性を愛するのが〈True Love〉なのかな。心中死などは、まさに、繁殖・生き残りの戦略からはずれている。真逆の行為であるといえるだろう。有利な相手を配偶者として選べば、それは必ず打算なのか。繁殖・生き残りに不利な配偶者選びをすれば、それが〈True Love〉なのか、である。

正体不明な、ミステリアスな、この他ならぬ〈True Love〉の観念は、それ自体は繁殖・生き残りに有利ではない。しかし、繁殖・生き残りに有利な配偶者を獲得し損なったとき、現に獲得し得た相手に満

足」することに資するだろう。現実的で獲得可能な、配偶者を獲得しようとして後押しするものとも成るだろう。(True Love) 観念は、意外に普遍的でそれなりの機能を持ったものかもしれない。

で、私の結論は、こうだ。近松門左衛門が滞在中の大坂で、心中があった。もちろん「発見者」はかならずいるし、現にその死に姿を見たものが、少なからずいたはずだと、私は思う。その時、血の海の中に横たわる二人は、美しかったのではないだろうか。その場面を目撃し、吹聴した者達によって、時ならず(True Love)の観念が、大坂市民の脳内に、降臨したのではないか。その強力な観念は、なかなかの衝撃波を彼らの間に反響させ、それは、近松門左衛門自身の意識にも及んだ。そのまま、素直に近松はそれを『曾根崎心中』として作品化した。そして、空前の大ヒットをもたらしたのである。

こんな大ヒットがもたらされたのだから、そこから100パーセント方向転換しても良さそうだが、近松はそうはしなかった。こんなお馬鹿で夢みたくない事に、人々がとらわれつづけるはずがなく、どこかで正気に戻るはずだ、と強固に信じていた形跡がある、と思う。ほとんど同じ時期に『からさき八景屏風』を、さらに宝暦元年正月には『薩摩歌』を世に問うた。そうしてみても、近松はやつと、そんなお馬鹿でおめでたいものに人々がいつまでもとらわれつづけているはずがない、という、思い込みを捨てたのかも知れない。それが『心中二枚絵草紙』である。やつと。しかし、近松門左衛門はあきらめない。その後、近松のつくる世話物浄瑠璃の特に心中ものとよばれるそれには、じわつとコンスタントにバイアスがかかりつづける。それは、紀海音などの作品の要素を取り込みつつ、『心中宵庚申』という極北に至るのである。

(注)

①日本庶民文化史料集成 第七巻 人形浄瑠璃(一九七五年 三一書房)などで容易にアクセス出来る、よく知られた記事である。

②岩波新古典文学大系38『六百番歌合』(一九九八年 岩波書店)など参照。

③新編日本古典文学全集20『源氏物語(一)』(一九九四年 小学館)など参照。

④雑誌「文学」(日本文学協会)一九七〇年年四月号所収の論考「注釈の原典―『曾根崎心中』の場合―」による。

⑤この謡曲『田村』をネタにした川柳は、『川柳柳多留』に大量に見える。ネットで好事家のHPなどを御覧いただきたい。

URL=<http://jixia.web.fc2.com/NoPage/NohSenyu/Nohsen13Tamura/NohSenyu13.html>

⑥清文堂出版『紀海音全集』(一九七七〜一九八〇)の第七巻所載。

⑦小学館『新編古典文学全集75』による。

⑧注⑦に同じ。

⑨千住由貴子『『曾根崎心中』について―九平次の中に潜むもの―』活水日文36号 一九九八年十月

⑩『近松全集』第十六巻 岩波書店 一九九〇年刊

⑪松崎仁が「米屋心中の狂言と『曾根崎心中』」において、劇中劇の『半七三勝七年忌』が三勝・半七に名を借りているが「米屋の心中」であること、『心中大鑑』の記事などから元禄十六年五月中旬以前と推定し、近松全集第十六巻の同作解説も、役人替名が元禄十六年の『役者御前歌舞伎』とほぼ一致するなど傍証としてあげ、松崎の推定に従う、としている。

⑫祐田善雄『浄瑠璃史論考』(中央公論社 一九六五)所収『曾根崎心中』道行の構成」

- ⑬ 松崎仁「米屋心中の狂言と『曾根崎心中』」(『国語と国文学』昭和三十八年五月号)注⑩と同じ。
- ⑭ 菊池聡子「『曾根崎心中』—近松門左衛門の歌舞伎狂言からの考察—」(『白百合女子大学 言語・文学研究センター 言語・文学研究論集』第10号 二〇一〇年)
- ⑮ 『近世文芸叢書 4』(国書刊行会編 一九七六年)による。
- ⑯ 一九九四年初版。筆者が参照したのは、二〇一六年版。 Updated and Revised Edition Basic Books New York.

# 曾根崎心中とは何だったのか？

常吉幸子

## Tracing the origin of Romantic Love Ideology in Sonezakisinju.

Yukiko Tsuneyoshi

### Abstract

“Sonezaki sinju” was a kind of epoch-making master piece in Japanese history of plays. It is on a incident, Double Suicide of Lovers. This Theme of plays was popular between Kabuki creators and Kabuki fans. But after Sonezaki sinju, It became overwhelmingly popular in Total Japanese Plays, Kabuki and Bunraku(the Puppet plays).

In this essay, I tried to make it clear that the Romantic-Love-Ideology of Sonezaki sinju came only from the incident concerned itself, and its stunning reputation. Nothing came from the Kabuki career of Chikamatsu, or his own conviction. It can be proved by examination of contents of the Kabuki Play “Karasaki Hakkei byoubu”. We can see the contents from the Picture Book of this Kabuki Play. This tells us that Chikamatsu Monzaemon was not a simple Believer of True Love.